

夢みるウミガメ

2009.05.28

人間って……

どれだけ 期待に まみれた イキモノなんだろう。

ウミガメになった私は、そう 思う。

ついこの間まで ニンゲンだった私は、
ある朝 とつぜん。

目覚めたら、ウミガメになっていた。

もし この私が ウミガメになってしまったら？

ニンゲンだった頃には、そんなこと、想像したことすらなかった。

それに、それが 空想の上のことだったとしても、
はたして、ウミガメになった自分を受け入れられるものかどうか、
疑問であったろう。

たとえ それが、天罰として与えられた結果でも。

だけど、実際に ある日とつぜん ウミガメになってしまった私には、
もう、そんなことは、どうでもよくなっていた。

もちろん、私がウミガメになった理由なんて、ない。

天罰が下るようなことをした覚えもないし、
ウミガメになりたいと 熱望したことも、ない。

理由があろうと、なかろうと。

私は、いま、ウミガメなのだ。

私は、海の中で、とても リラックスしていた。

いま、この海で。

ウミガメであることを、とても 楽しんでいた。

しばらくは、ウミガメでいることに 夢中だった。

ニンゲンとは まるで違う、カラダの構造。

なぜか 失われていない ニンゲンのときの記憶とともに、
私は ウミガメライフを エンjoyした。

まるで、いつかまた ウミガメであることに 別れを告げて、
別のイキモノ、もしくは イキテイナイモノ に 変身することを
知っているかのように。

私は、自分でも 意外なほど、
いま、ウミガメとして 在ることに、満足していた。

今日も 私は、
ぷかぷかと こちよい波のダンスに 揉まれながら、
空を 見上げていた。

白い雲が、浮かんでは、消えていく。
空に 飲み込まれていく。

まるで、ニンゲンの持つ `期待`のようだ。

ニンゲンだった頃の私は、いつも 期待とともに 生きていた。

なにかに期待し、誰かに期待し、どこかに期待し、
そして、「いつか」という名の 'とき' にまで、期待していた。

流れゆくように見えながらも
流れたことは かつて いちどもない。

瞬間、また その瞬間に 消えてゆく。

それを 知りながらも、
永遠に つながることのない「いつか」に、想いを 馳せる。

空に飲み込まれていく雲は、
そんな 私のニンゲンのときの記憶を かきまわし、
少しだけ、私を 悲しくさせた。

さっきから、下腹部に 違和感を 感じていた。

この痛みは、ウミガメになってからは、初めてのものだった。

ウミガメになってからは、というのは・・・
ニンゲンであった頃には、よく経験していたものだから。

ときおり襲ってくる この痛みと、私は よく 闘ったものだった。

・・・と、そんなことを 思い返している余裕もなく、
私は いつしか、必死になって 両手で 水をかきわけ、陸へと向かっていた。

陸へ上がったからといって なにが できるのかは 知らなかったが、
そうせずには いられなかった。

いつもは 楽しげに ぷかぷかと浮いている私の異変に、
波たちも気づいたのであろう。

波と波とが 手をつなぎ、大きく揺れて、
私を 陸へ、陸へと 押し出してくれた。

私は、ゆっくりと、砂浜へ 踏み出した。

なにが起こったのか、わからなかった。

ニンゲンであったときにさえ経験したことのなかった
激しい痛みを感じたが、もはや その痛みを 抵抗できる力は
私には 残っていなかった。

大きく 息を吸い上げ、
波に 飲み込まれるかのように その痛みを 受け入れると……

あとは もう 覚えていなかった。

いまや ウミガメである 私の小さな脳の記憶容量を超えた出来事が、
私に 襲いかかってきていた。

……らしい。

気がついたときには、私は 無数の卵に 囲まれていた。

私の、かわいい かわいい コドモたち。

ニンゲンであった頃には かなえられなかった、私の夢。

出来事に期待し、相手に期待し、将来に期待した。

そして、期待を裏切られた過去にすら、
なんらかの意味を、期待した。

だけど、期待からは なにも 生まれなかった。

期せずして ウミガメとなり、
その'期待'を あっさりと 経験に変えた私は、
大きな声で、笑った。

人間って。
どれだけ 期待に まみれた イキモノなんだろう。

期待は、蜘蛛の吐き出す糸のように さまざまな模様を織り成し、
未来へも 過去へも 手を伸ばしてゆく。

それが かなうことなど、永遠に ない。

そう、どこかで 知りながら。